

戦争孤児の研究 本格始動

太平洋戦争末期の空襲で家や家族を失った戦争孤児の学術的研究は、手つかずの状態が続いていた。だが近年、歴史学や児童福祉論の専門家らによって、孤児だった人々への聞き取り調査や資料収集が進められるなど、体系だった研究が本格的に動き出している。

(文化部 前田啓介)

戦争孤児の多くは、駅などで寝起きする生活をせざるを得ず、生きるために物乞いや盗みをした孤児もいた。その数は1948年の政府の調査結果では約12万人。しかし、実態はほとんど解明されてこなかった。戦争孤児だった人たちの証言が取れなかったためだ。立命館大などで非常勤講師を務める歴史学者の本庄豊氏によれば、孤児たちは「汚い」「臭い」と差別され、親戚宅に預け

学校に通えず、就職もままならず

られても学校に通えず、就職もままならないことが多かった。本庄氏は「戦争体験は通常、限られた期間だが、彼らは孤児になった時から今まで、生きた時間そのものが戦争体験となっている。そのつらい経験を簡単に話すことはできない」と言う。

浅井春夫・立教大名誉教授(児童福祉論)によれば、そもそもマイノリティーである戦争孤児が研究対象となることがまじった。その現状を変えようと2016年、浅井氏や本庄氏らが研究会を作り、聞き取りや資料収集を始めた。

この時期に語っておかなくてはと証言する元孤児も出てきており、研究会はその成果として今年、『戦争孤児たちの戦後史』(全3巻、吉川弘文館)シリーズの刊行を開始。「総論編」「西

日本編」を出し、来年2月には「東日本・満洲編」を刊行予定だ。

「総論編」では、国が国民の命と暮らしを守る使命を放棄したことや、戦争孤児を放置・無視し、厄介な存在として扱ったことなどを問題点として挙げた。「野良犬」「バイキンの塊」などと虐げられた点にも触れ、浅井氏は「戦争孤児の負のイメージが国民共有の記憶となってしまった。戦争による被害は国家の責任であるのに、明確になっていない」と指摘する。

戦争孤児の資料は、孤児を受け入れた児童養護施設にもほと

んど残っていない。高度経済成長期の建て替えの際、失われたケースが多いという。だが、終戦直後に戦争孤児の救済活動を始めた東京都中野区の「愛児の家」には、児童名簿や育成記録など多くの資料が残されており、これらをまとめた全5巻の資料集と写真資料別巻が不二出版から順次刊行される。

戦争孤児研究は始まったばかりだ。浅井氏は「今後の研究の材料となる資料の整理、土台を作ることであれば」と話し、本庄氏も「戦争孤児で語り出した人はまだ一部で、本質は見えていない。今後も聞き取りを続けたい」と語っている。

聞き取りや資料収集進む



京都市近郊のがれきりで遊ぶ孤児たち(児童養護施設「積慶園」所蔵)

自身の境遇、調査内容本に

「本当のこと残したい」

戦争孤児だった金田茉莉さん(85)は自身の境遇や、他の孤児の証言を収録した『かくされてきた戦争孤児』(講談社)を出版した。

1935年に東京・浅草に生まれた金田さんは早くに父を亡くし、母と姉、妹と暮らしていた。44年に宮城県に学童疎開したが、これが家族との永遠の別れとなった。45年3月の東京大空襲で、家族を失ったからだ。



自身の戦争孤児の過酷な体験を語る金田さん

関西の親戚に預けられた金田さん。本にはそこで浴びせられた言葉も載せた。お前などいらん、お前は親戚中から捨てられた野良犬だ。あまりのつらさに、「お母さんのところに行きたい」と泣きじゃくったこともあったという。

戦争孤児だったことを語るようになったのは、50歳の頃。「本当のことを歴史として残しておきたい」と思ったからだ。以来、孤児だった人を探し、聞き取りを重ねたが、今も孤児だった過去を語れない人は多いという。「中学も出ていないからすごく苦労した。あまりに重い荷物を背負ってきたから、話せないんです」。時間では解決できない戦争の惨禍がある。